『門』論

――「語り」の機能と参禅の意味するところ――

佐藤裕子

一　はじめに

作品『門』をどのように読むかをめぐり、常に複数の解釈が提示されてきたことについて、畑有三氏[1]はその理由を作品が内包する「無数の対照的な関係」にあることを指摘した。対照的とは、本来二つの事柄が互いに対立している状態を指す言葉であるが、『門』にあっては、二つの事柄が別々に起こるというよりは、一つの事柄が相反する〈二つの相〉を見せるという意味において成立する。作品中様々なレベルで展開される〈意味の対立〉こそが、『門』という作品の享受のされ方を決定してきたといってもいいだろう。この時、注意しなければならないのは、〈対立する二つの意味〉のうちどちらが正しいかではない。語られた一つの出来事が、別の意味を帯びて立ち現れてくるという作品の構図こそが、何よりも重要となる。

本論においては、常にもう一つの意味を喚起するように機能する『門』の特徴的な〈語り〉によって開示される宗助・お米の〈現在〉と〈過去〉に焦点をあて、「参禅」の意義を併せて、その内実を解明することを試みるものである。

※引用は一九六五年版漱石全集（岩波書店）による。尚、旧字体は新字体に改めた。

註（1）　例えば『門』を暗い作品と捉えるか、明るい作品と捉えるかについては次に挙げる二つの系譜が存在することは周知のところである。暗い作品と捉えるその主なものは、小宮豊隆『漱石の芸術』（岩波書店・一九四二年十二月）、片岡良一「門」解説（春陽堂文庫・一九四九年十二月）の系譜である。また明るい作品と捉えるものとして、谷崎潤一郎「『門』を評す」（『新思潮』一九一〇年九月）、江藤淳『決定

版夏目漱石』（新潮社・一九七四年十一月）、内田道雄「『門』をめぐって」（『古典と現代』一九五八年四月）等がある。また、「参禅」をめぐっては宗助の参禅を唐突で不自然なものと捉える論と、庶民的な禅理解としてその必然性を説く論の二つの系譜が存在する。ここを起点としてさらに、参禅が作品の結末にふさわしくないとして、構成上の破綻を説く論が出てくるのだが、肝心なのは作品の文脈から期待される結末と作品の現実とがそぐわないことを指摘するのではなく、そのように描かれている現実の結末をどのように解釈するかであろう。参禅を否定する主な論は、谷崎潤一郎・前掲論、正宗白鳥「夏目漱石論」（『中央公論』一九二八年六月）、片岡良一・前掲論がある。また参禅を肯定する論としては、遠藤祐「『門』の世界―試論―」（『文学』一九六六年二月）が代表的なものである。

（2）畑有三「門」（『国文学』十四巻五号・学燈社・一九六九年四月

二　「語り」の機能

確かに作品『門』は、その冒頭から「窮屈な寸法」の縁側、「疑り出すと分からなくなる」文字、「何時壊れるか分からない虞がある」のだけれども、不思議にまだ壊れた事のない」崖などの表現のうちに、ある不安と恐れとを予感させながらも、秋日和の日曜の、宗助とその細君お米のあくまで穏やかな午後の描写から始まっている（以下この節の引用は特記のない限り第一章からのものである）。これらの表現の意味するところを厳密にたどれば、狭い縁側も一分の隙も無いほど狭いのではなく、「広大な」空と比べた時に「窮屈」なのであり、また字にしてもそれは決して解けない混乱なのではなく、崖もまた今にも崩れそうな様子を見せつつ結果としては一度も崩れたことがないというように、常に可能性としての危機的状況を我々読者に喚起する形で物語が語り進められていることには十分注意しなければならないだろう。第一章においては、日当たりの良い縁側に横になる宗助と、障子越しに茶の間で裁縫をするお米との間に交わされた他愛のない会話に始まり、一通の手紙を認めた後、その手紙を投函しがてら散歩にでた宗助と入れ違いに弟の小六が家にやってくるまでの小一時間程の間の出来事が語られるのであるが、手紙の宛先である佐伯とは誰なのか、またその内容はどのようなものか、また訪れた小六の示すいらだちが何に由来するのかという疑問を除いて、ここで語られているのは〈何も起こらない静かな日曜の午後の情景〉なのだ。にもかかわらず、作品内に散見する「窮屈」「塞がれる」「寒い」「影」「壊れる」「暗い」等の負のイメージを内包する語の使用によって、語られてある内容とは全く逆の意味が生じているのである。言い換えるなら〈何が語られているか〉ということと、それが〈どのように語られているか〉ということをずらすことによって生ずる効果といってもいいだろう。作品内部に存在する無数の対立の図式を際立たせるように作用するこのような〈語り〉こそが、物語内容を語る以外に『門』の〈語り手〉に付与

されたもう一つの役割に外ならない。この『門』の叙述について佐藤勝氏[1]は、〈語り手〉が選択する〈視点〉が「宗助のところに固定されて絶対化しうるもの」としてではなく、お米や小六、あるいは佐伯の叔父夫婦の位置に移動することのできる「相対的なもの」として設定されていることを指摘されたのであるが、さらにこの〈語り手〉は第二章の冒頭において「そこに気のつかなかつた宗助は」という一文から、宗助自身に関する、しかも宗助自身の知らないある一つの事実を示すのである。このようにして、主に宗助の〈視点〉から、宗助の認識に寄り添いつつ、しかし時に宗助とは別の感慨をさりげなく織り込みながら、物語は進められる。

お米の「手紙じや駄目よ」（一）という言葉から、宗助自身が介入する必要のある用件を抱えていることが推測されるにもかかわらず、散歩に出た宗助が手紙を投函した後考えたことは、「どこか遠くへ行つて、東京と云ふ所はこんな所だと云ふ印象をはつきり頭の中へ刻み付けて、さうして夫を今日の日曜の土産に家へ帰つて寝やう」（以下この節の引用は特記のない限り第二章からのものである）というものであった。

彼はまず電車に乗り込み、そこで「凡ての広告を丁寧に三返程読み直し」、駿河台下で下車してからは本屋で美しい装丁の洋書を眺め、時計屋では「金時計の安価」なのに驚き、蝙蝠傘屋を覗き、それから西洋小間物屋では襟飾りに目を付け、呉服屋では多くの織物の名前を覚え、京都の襟新の出店では長い間「精巧に刺繍をした女の半襟」を眺めるのである。「それから半町程の間は詰まらない様な気分がして、往来にも店先にも格段の注意を払は」ず歩を運ぶのであるが、再び雑誌屋の広告に目を留め、そしてこの店の曲がり角の影になっている所で「黒い山高帽を被つた男」から一銭五厘の「大きな護謨風船」を買い、「奇麗な床屋」を探しているうちに「日が限つてきた」ので、電車に乗って家へ帰るというのが、「週六日半の非精神的な行動」で失われた落ち着きを取り戻そうと試みられた散歩の内容である。この間に、宗助がその時浮かんだ思いを、過去の自分のありようと比べる場面が二度繰り返される。一度目は本屋で History of Gambling という洋書に「幾分かの新しい味」を感ずるが「好奇心」がちっとも起こらなかったことを「一昔し前」の自分と比べて半ば驚き、襟新では「細君に似合いさうな上品」な半襟を買おうと考えた途端に、それは「五六年前」の事だとしてその思い付きを打ち消してしまうのである。つまり「一昔前」ならばこの本を必ず手にとって内容を調べたであろうし、半襟にしても「五六年前」ならば買って帰って細君を喜ばせたはずが、〈現在〉の宗助はそれをしないというのである。この短い挿話は、「萬象に疲れた人の様」（七）と形容される〈現在〉の宗助とは異なるもう

一つの姿をした宗助の存在したことを我々読者に印象づけるとともに、〈過去〉[2]が宗助の〈現在〉の認識と行動を押し止どめる装置として機能していることを明らかにしている。この章においても〈語り手〉は宗助の心情を語るのに「物淋しさ」「淋しみ」「詰まらない」「寒い」「果敢ない」という負のイメージを内包する語を使用する。そのことによって、自ら望んで出かけた散歩にもかかわらず宗助の内部に〈諦め〉を強いる何物かが存在し、常に満ち足りない思いを抱える宗助の姿を描き出すことに成功しているのだ。

続く第三章は、銭湯から帰った宗助と小六が、お米を加えて三人で夕食の膳につくところから始まる。ここでは主に小六の兄に対する評価と、四章・十三章後半部・十四章において明らかにされる過去の事件の伏線[3]が描かれているのであるが、小六の兄に対する評価は次のようなものである。

小六は腹の中で是が兄の性来の弱点であると思ひ込んでいた。彼は自分で学校生活をしているにも拘はらず、兄の日曜が、如何に兄にとつて貴といかを会得できなかつた。六日間の暗い精神作用を、只此一日で暖かに回復すべく、兄は多くの希望を二十四時間のうちに投げ込んでゐる。だから遣りたい事があり過ぎて、十の二三も実行出来ない。否、其二三にしろ進んで実行にかゝる、と却つてその為に費やす時間の方が惜しくなつて来て、つい又手を引込めて、凝としているうちに日曜は何時か暮れて仕舞ふのである。自分の気晴しや保養や、娯楽もしくは好尚に就いてゞすら、斯様に節倹しなければならない境遇にある宗助が、小六の為に盡さないのは、盡さないのではない、頭に盡す余裕のないのだとは、小六から見ると、何うしても受取れなかつた。兄はたゞ手前勝手な男で、暇があればぶら〳〵して細君と遊んでばかりいて、一向頼りにも力にもなつて呉れない、真底は情愛の薄い人だ位に考へてゐた。

注意しなければならないのは、ここでの〈語り手〉は小六の心中を代弁するという体裁を取りつつ、実は宗助の側に立ち、弁護する立場を取りながら物語を進めているということである。『門』の〈語り手〉が、登場人物の全てに公平な立場をとるものでないという、もう一つの〈語り〉の特質が見えてくる。

さらに伊藤博文暗殺の話題から、小六の「兎に角満州だの哈爾賓だのつて物騒なところですね。」という言葉に続けて「夫や、色んな人が落ち合つているからね」という宗助の言葉にお米が「妙な顔」をすること、「是でも元は子供が有つたんだがね」という宗助の言葉に「ぴたりと黙つて仕舞う」お米の姿から、「満州」と「子供」[4]に関する夫婦だけが了解し得る出来事が存在することが示されるのだ。

かくして、三つの章を費やして連綿と描かれた〈何も起こらない日曜〉は静かに幕を下ろすのであるが、この三章のうちに作品の基調を決定づける道具立てが全て出揃ったといってよい。三章までに登場したあらゆるものが、今まさに別の意味を帯びて立ち上がろうとしている。そして作品の焦点は明らかに〈過去〉に絞られてゆくこととなる。

註（1）佐藤勝「『門』の構造」『講座夏目漱石』三巻、有斐閣・一九八一年十一月

（2）佐藤勝氏（前掲書）は、この点に関して「物語は現在の中に随時過去が介入し、その過去との響き合いにおいて現在が一々意味づけられるようになっている。」と指摘しておられる。

（3）「伏線」については、片岡良一（『門』解説」前掲論）、小宮豊隆（『漱石全集』解説」岩波書店、一九五六年七月）、あるいは越智治雄（『漱石私論』角川書店、一九六五年十二月）が、その緻密さを指摘している。

（4）ただここで確認しておかなければならないのは、先に〈子供〉について言及したのは、お米の方であるということだ。お米は宗助に「貴方があんな玩具を買ってきて、面白そうに指の先へ乗せていらつしやるからよ。子供もない癖に」と語りかけ、その言葉に「さうか」と答えた後、「是でも元は子供が有つたんだがね」と付け加えるのである。

三　〈過去〉の物語

宗助とお米の〈過去〉は、三回に分けて語られる。しかも四章と十三章後半部においては、〈過去〉の事件そのものではなく、宗助と叔父の財産をめぐるやりとりと、宗助・お米の子供に関する不幸な体験を中心にして、〈過去の事件の結果〉として二人が立ち会った出来事がまず語られるのだ。そして十四章に至って初めて、安井とお米と宗助の三人の出会い、三人が共有した時間、そして宗助とお米が安井を裏切ることになる事件までが回想されるという仕組になっている。

四章において、「彼の今の生活が、彼の様な過去を有つてゐる人とは思えない程に、沈んでいる如く」と語り出される宗助の〈過去〉の物語は、小六の学資を工面しなければならなくなった経緯を説明する形で進められる（以下この節の引用は特記のない限り第四章からのものである）。事件の核心は伏せられたまま、ここでは専ら叔父に売却を一任した地面家作にまつわる話に終始し、京都―広島―福岡―東京と流浪する中で、本来ならば自らが所有すべきものであるという思いと、〈過去〉の事件のために所有することを諦める思いと、この二つの意識の間で揺れ動く宗助の姿が語られる。結局何故彼が財産の相続を諦めるのかここでは明らかにされず、ただその代償として各地を流転すること、財産を手放さざるを得ないこと、そして「好い事を予期する権利のない人間」という彼等自身の言葉から、徐々に事件の重さが浮かび上がってくる仕掛けとなって

いる。そして、横領の事実を確かめる前に叔父が死に、小六の学資の工面という差し迫った問題を抱えつつ、かといって「物に屈託する気色」もなく、「昔のやうに機敏で明快な判断」を下すことも出来ず、季節のうつろいを眺めながら、ひっそりと暮らす宗助とお米の姿が語られるのだ。

この四章で明らかにされる〈過去〉は、まず小六の人物像を語り出すところから始まるのであるが、小六を評して、「書生時代の宗助によく似てゐる」「昔の宗助に其儘である」という〈語り手〉の言葉は小六のことを語りつつ、実は小六を見る宗助その人に焦点化しているといっていい。現在の小六の姿はかつての宗助の姿そのままであるという感慨は、さらに次のような言葉となって表現される。

宗助は弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生して、自分の眼の前に活動してゐる様な気がしてならなかつた。時には、はら〳〵する事もあつた。又苦々しく思う折もあつた。そう云う場合には、心のうちに、当時の自分が一図に振舞つた苦い記憶を出来る丈屡呼び起こさせるために、とくに天が小六を自分の前に据ゑ付けるのではなかろうかと思つた。さうして非常に恐ろしくなつた。此奴も或は己と同一の運命に陥るために生まれて来たのではなかろうかと考えると、今度は大いに心掛かりになつた。時によると心掛りよりは不愉快であつた。

十四章に先だって意味づけられた宗助の〈過去〉の事件の記憶とは、「当時の自分が一図に振る舞つた苦い記憶」とされるものであり、また小六が自分と同じ運命に陥るかもしれないことを考えると「不愉快」になるというのである。後に「大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである」と表現される宗助とお米の愛の顛末のもう一つの側面である（以下特記のないものは十四章からの引用である）。

「宗助とお米は仲の好い夫婦に違いなかつた。」と語り出される宗助とお米の「仲の好さ」とは、無条件に幸福でゆるぎないものとして存在するのではない。佐藤泰正氏[1]が指摘するように、〈語り手〉が「夫婦の和合の深さを強調すればするほど」、その〈語り〉の裏に潜む矛盾が際立ってくるのであるが、この点について氏は次のように述べている。

彼らの深い「抱合」にもかかわらず、あの「（結核性の）恐ろしいもの」が存在したというのではない。その存在を知りつつ、それを抱えたままに彼らはその孤独な「抱合」の円を描きはじめたというのである。

まさにこれは、「水に弾かれた勢で、丸く寄り添つた結果、離れる事が出来なくなつた」宗助とお米夫婦の〈愛の実相〉と呼ぶべきものである。だからこそ、彼らは「時々自分たちの睦まじがる心を、

自分で確と認める」必要がある。なぜなら、二人の〈過去〉こそが「二人を結びつける唯一のもの」[2]だからである。

そして注意を要する点は「言逆に顔を赤らめ合つた」ことがないということが、幸福な夫婦のありようを示すものであるとは一概にはいえないということである。対等な他者として面と向き合い、互いに全的に関わろうとした時、殆どの場合自分の求める姿とは違う相手の実像が浮かび上がってくるからである。その違和を見なかったふりをしてやり過ごすのと、あるいは許しがたいものとしてぶつかりあうのと、果たしてどちらが誠実なのか。例えば、三度繰り返された出産にまつわる不幸な体験は、二人が共有しているにも拘わらず、宗助の痛みが観念的であるのに対して、お米はより具体的に肉体的痛みとしてそのことを引き受けるが故に「異質」[3]なのであり、また死産した子供に直接手を下したのは自分であるとして、たった一人でその痛みと向き合うのである。お米が易者の門をくぐったのも、自分の引き受けている痛みのその根本に〈過去の出来事〉が関与していることを予感していた故の行動である。繰り返すが宗助とお米の引き起こした〈姦通〉という事件について、相続するべきはずの遺産を要求する権利を放棄しなければならないことや、三度まで繰り返される子供の死という出来事によって、〈罪〉であることを規定されるという描かれ方をしていることには十分留意しなければならないだろう。

そして〈語り手〉は十四章に至ってようやく宗助がどのようにしてお米と出会い、結ばれることになったのかを語り出す。「服装にも、動作にも、思想にも、悉く当世らしい才人の面影」を漲らした宗助と「よく何処かに故障の起る」安井とが、ふとしたきっかけから「懇意」になったことを皮切りに、夏休みの後、安井がお米を伴って京都に戻ってきたこと、初め安井はお米を「妹」だと宗助に紹介したこと、けれども憶断はすぐについたこと、そしてお米をはさんで微妙な均衡を保ちながら、三人が親しさを増して行く様子が語られるのだ。そして事件が起こる。

> 大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである。二人が起き上がつた時は何処も彼処も既に砂だらけであつたのである。彼等は砂だらけになつた自分達を認めた。けれども何時吹き倒されたかを知らなかつた。

注意しなければならないのは、ここでも厳密に事件そのものが語られているのではなく、気が付くとすべては終わっていて、「砂だらけ」の自分達の姿をまず認めたというのである。そして「彼等は彼等の眼に、不徳義な男女として恥ずべく映る前に、すでに不合理な男女として、不可思議に映つたのである。」と続く。まさに〈語り手〉は、事件そのものではなく、その渦中にあって宗助とお米が

何を考えたかに焦点をあて、伝えようとするのである。彼らは〈事件〉そのものについては、〈罪〉とされるのは「不合理」「不可思議」であると考え、けれどもその結果として起こった財産相続や子供の死については、〈事件〉と結び付けて考えている。つまり彼らは、〈姦通〉という明らかに見通せる罪の構図によって苦悩するというよりは、なおそこにおさまらない一つの意識、自らの行為を「不徳義」（十四）ではなく「不合理」（同）と捉える意識によって苦悩しているからだ。

註（1）佐藤泰正「『門』―〈自然の河〉から〈存在の河〉へ―」「日本文学研究」十五号、梅光女学院大学日本文学会、一九七九年十一月

（2）上出恵子「夏目漱石『門』論」活水論文集二十四巻三号、一九八一年三月

（3）柄谷行人『批評とポスト・モダン』福武書店、一九八五年四月

四　参禅の意味するもの

いわゆる〈小説的現在〉を生きる宗助とお米が、小六の学資をめぐって佐伯の叔母に手紙を出してから、夫婦がどのように過ごしたかをたどると、次のようになる。

まず第五章では佐伯の叔母が二人を訪問したこと、宗助が歯医者へでかけたこと、六章においては、小六を引き取る話が決まったこと、宗助に残された唯一の財産である抱一の屏風を売ったこと、七章では家主の坂井の家に泥棒が入り、そのことを契機として坂井家と関わりができたこと、八章ではお米と小六が障子張りをしたこと、九章では宗助が売った抱一の屏風を坂井がそれと知らずに買い求めたことを知った宗助が、坂井を訪問してそのことを確認したこと、それと併せて坂井が子福者でにぎやかな様子が語られる。十一章と十二章では「暮れの二十日過ぎ」になって、お米が発病した顛末が語られ、続く十三章では新年の頭を拵えるために宗助が髪結床に出掛けたこと、その帰りに坂井に寄った宗助が、甲斐の織屋からお米のために銘仙を一反買ったこと、子沢山の坂井の家の様子から、二人の子供にまつわる不幸な〈過去〉が語られ、その夜お米が初めて易者に占ってもらったことを宗助に打ち明けたこと、このことが契機となって十四章の回想の場面に移り、さらに十五章は大晦日、十六章では正月元旦から七日までの静かな夫婦の生活が描かれ、七日の夜坂井に招かれた宗助が安井の消息を聞いて呆然と帰宅するまでが描かれる。そして十七章では、宗助はお米に安井のことを打ち明けられないまま二日を過ごすのであるが、二人で寄席へ行っても楽しめず、ついに三日目の夜「参禅」を決意し、十八章から二十一章にかけて宗助の「参禅」の顛末が語られるのである。

以上が「参禅」に至るまでの道筋なのであるが、ここで語られて

いることは「参禅」を除いて、例えば歯が痛むから歯医者に行くとか、生活が逼迫したために屏風を売るとか、坂井の家に入った泥棒が宗助の家の庭に投げ捨てていった手文庫を届けに行くとか、具合が悪くなったお米を看病するとか、宗助のとる行動は明らかに原因がありその結果としての、合理的に説明することのできる行動であるのに対して、「参禅」がそのようには語られていないことに注意しなければならないだろう。

宗助が参禅を決意したのが、十七章の終わり近くで、安井が坂井の家に招かれたまさにその夜の出来事であったこと、そして十八章において「紹介状を懐にして山門を入」（十八）るまでにほぼ一週間[1]の日数が経過していることから考えて、宗助にとっての参禅の直接の動機は安井その人なのではなく、宗助自身の内部に潜む不安と苦痛であったことが推測できる。内田道雄氏[2]が「宗助の『心の実質』の細さ、ひよわさ、無気力」それこそが「罪」であるとした所以であろう。

「如何にせば、今の自分を救う事が出来るかという実際の方法のみを考へて、其圧迫の原因になった自分の罪や過失は全く此結果から切り放して仕舞つた」と、〈語り手〉は作品の肝心を語り始める。以下作品に巧妙に配置されている言葉をつなぎあわせてみると、宗助にとって参禅とは、「積極的に人生観を作り易へ」（十七）るために、「心の実質が太くなるもの」（同）であり、そして「弱くて落ち付かなくつて」（同）「不安な不定な弱々しい自分を救ふ」（十八）ための「実際の方法」（十七）であったという外見を持っている。ところが「父母未生以前本来の面目」とは何かという公案が与えられた途端に、自ら選んだ参禅という行為が「迂濶な真似」「見富違の所作」（十八）として宗助に認識されはじめていることを見逃してはならないだろう。「参禅」においても、やはり〈相反する二つの相〉を見せるのである。第十六章において予告された安井の出現とは、宗助とお米が「時としては申し合はせた様に、それを回避」（四）し、あるいは「仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互とむきあつて」（十七）あえて見ずにすませてきた「人に見えない結核性の恐ろしいもの」（同）を突き付ける契機となっている。まさに〈自分を不安の原因に直面させるもの〉の到来である。宗助にとって「参禅」そのものというより、「参禅」において与えられた「父母未生以前本来の面目」とは何かという公案こそが決定的なものであり、その底に一つの恐れとして予感し、それを回避していたものが、現実に彼と、彼の日常性を根底からのみこもうとして、襲いかかってくる。ここに『門』の主題が現れてくるのである。

確かに『門』は、それ以前の漱石の作品と「かなり異なったはだ合い[3]」を持つ作品であり、その中で漱石はかつてないほどの「精彩

のある」[4]日常生活を描き出すことに成功している。このことは「作品の不統一、参禅の不自然さ」を指摘する正宗白鳥[5]をはじめとして、多くの論者がしばしば指摘している所であるが、江藤淳氏[6]はさらに続けて、宗助とお米の日常が魅力的に描かれる分、後半の二人の過去や参禅を設定した漱石を、いかにも「作為」的で「傷ましいもの」と評する。しかし「作為」あるいは「からくり」と称される宗助とお米の〈過去〉を、漱石は日常から逸脱したところから生まれる悲劇とはしていないことに気づくべきであろう。つまり、波乱に満ちた出来事が、日常に非ざる次元で起こるというのではなく、すでに日常そのものが、偶然と危険に満ちた〈時〉をはらんでいるということなのだ。越智治雄の「深いリアリストのみが真にアイデアルでありうる」という言葉は、まさに〈人間の現実というもの〉を見事に浮かび上がらせているといえよう。

「父母未生以前本来の面目は何か」という公案が与えられ、自分の部屋に戻った宗助がまず考えたことは、その公案の性質が「如何にも自分の現在と縁の遠い」ものであるということなのであるが、以後座禅を組ながら宗助が考えたことは「公案」そのものについてではなく、〈何も集中できないこと〉〈何も考えられないこと〉であり、「安井」についてであった。度々寝過ごしたり、「すぐ考えるのが厭にな」（十八）り、お米に「消息」（々）を知らせるという口実のもとに長い手紙を認め、さらには「村をうろつい」（同）たりと、〈語り手〉が伝える「参禅」中の宗助の行動はまさに悟れず、気が散るばかりで、引き裂かれる一方の宗助の姿なのである。自ら選び取っているにも拘わらず、いざそれを実行してみると、「迂闊な真似」（同）をしていると感ぜられるという意味では、「参禅」は第三章で実行された散歩と同じである。

宗助とお米は自分たちが「自然が醸した恋愛」（『行人』「帰ってから」二十七）によって結ばれたが、その愛は安井という一人の人間の不幸の上に成り立っていることを知っている。そしてその故に、自分たちの愛を肯定することは、同時に自分たちの存在を限りなく否定することになることも気づいている。それが安井出現の予告によって、それまであえて見ずに済ませてきた二人の愛の抱える矛盾とその実相を否応なく直視しなければならない状況に追い込まれ、宗助は苦悩する。この苦悩と不安から逃れるため「実際の方法」（十七）として「参禅」を選んだ宗助に、「父母未生以前本来の面目とは何か」という「自己発見の課題」が与えられたのである。まさにその意味において、この「参禅」は意義あるものといえよう。しかし、安井出現の予告、そして参禅と、そのいずれの場合においても宗助は逃げ出す。「禅」のみならず、「寺院の門」（十七）も「会堂の腰掛」（同）も、この矛盾に満ちた現実に生きる宗助とお

米の苦悩を救済するものでないとしたら、たとえそれがいかに偉大な宗教だとしても、彼らには無縁であろう。

結局のところ、宗助は〈自分が何に悩んでいるか〉という最も根本的な問題に気が付いていないからだ。

註（1）　この章は安井が坂井の家に招かれたその日の翌日、悪夢にうなされる宗助がお米に起こされるところで終わり、次の十八章は「宗助は一封の紹介状を懐にして山門を入った。」という一文で始まるのであるが、そのすぐ後に「紹介状を貰ふ四五日前」菜根譚を読む同僚に質問を掛け、其の日の帰りがけに「よく鎌倉へ行く」知り合いを紹介してもらい、その「次の日」其の人物を訪問と紹介状を書いてもらっていることから、安井出現の予告から参禅までの間、すくなくとも六日から七日は経過しているのである。

（2）　内田道雄「『門』をめぐって」「古典と現代」三号・一九五八年四月

（3）（4）　越智治雄『漱石私論』角川書店、一九七一年六月

（5）　正宗白鳥・前掲書

（6）　江藤淳『決定版・夏目漱石』新潮社、一九七四年十一月

五　おわりに

『門』という作品を、描かれている出来事だけに注目して読めば、〈姦通〉という事件を引き起こした一組の男女の苦悩の物語として実に分かりやすい構図を持っている。しかし作者は〈語り手〉に、〈罪としての過去〉とその〈罰としての現在〉という図式におさまりきらないもう一つの感情を語らせることによって、物語を単純な〈罪の物語〉に終わらせることなく、「父母未生以前本来の面目」という公案に集約される「自分は一体なにものであるか」という人間存在の根源的な問いかけに悩む人間を描くことに成功している。

結局宗助は自分の内部に存在するきわめて根深い罪を予感するにとどまり、その問いかけから逃げ出してしまうのであるが、以後漱石は明らかな罪の構図とその中で苦悩する人間を描く一方で、彼等の苦悩が直接その罪の構図と結び付くのではなく、宗助が予感したそれらに先立つある感情に悩む人間を描き続けることとなる。

【補説】

事件の後、安井は「満州」に渡り、〈現在〉は「冒険者」（十三）と称される人物に変化している。一方の宗助は風邪が元で腸チフスを併発して、九十日余りを療養する身の上となってしまったことを皮切りに、「寝入つた子」「別の人見た様に老けちまつて」「お爺さん〳〵している」（四）と評されるように、「よく何処かに故障の起こつた」かつての安井を連想させる人物に変化している。

まさに一人の女性をめぐって、二人の男性が〈入れ替わってしまった物語〉、あるいはもっと厳密に〈入れ替わったかのように変化した物語〉といってもいいだろう。この構図は後に『こゝろ』に

おいて今一度繰り返されることとなる。下宿でKと同居するようになった「先生」は、謹厳だったKがごく普通の〈恋をする青年〉に変化したことに気づくのであるが、それは「先生」自身の姿でもあった。またKの死後「先生」は妻から「若い時はあんな人ぢやなかつたんですよ。」（『こゝろ』上・十一）と指摘されるように変化したのみならず、自分が「Kの歩いた路を、Kと同じやうに辿つてゐるのだ」と気づいて、愕然とするのである。ここにおいて、二人の男の間に立つ女がどちらの男に魅かれていたのかは問題ではない。彼女たちは、いつも彼女たちの望んだものを手に入れようとし、手に入れたにも関わらず男たちの変化によって、それらから裏切られることとなるからだ。この点については、『こゝろ』等、他の作品も見渡した上で稿を改め詳説する積である。

（本学助教授）